



あけぼの

第37号 2013. 3. 1

宇和特別支援学校(養校舎)

図書館発行

詩集『幸せに咲く人生を』を読んで

高3 F 浅野裕貴

どれだけの

きむ



どれだけの
言葉をかわしただろう
どれだけの
時間をふれあったんだろう
どれだけ
笑い合って悩んで
明日を探したんだろう
この仲間たちと共にした
どれだけでも時間は
どれだけでも
僕(私)の人生に生きていくんだろう
ありがとう
仲間って最高
これからもよろしく



私はこの詩を読んで、この学校に入学してから今までのことを思い出しました。あれからもう三年が経ち、あと少して卒業です。改めて、この仲間と三年間一緒に良かったなと思えました。学校生活もあと少しです。残りの日々を楽しみたいです。高校を卒業したらみんなバラバラになるけれど私はこの三年間で得たものを忘れません。みんなありがとう
これからもよろしく

『もう涙はいらない』を読んで

高1 G 松下 泉水



この本は、三人の仲よしの女の子達がいじめ、いじめられるお話でした。
一人目の女の子の名前は「美和」です。最初は昨日まで仲のよかった友達に悪気があって言ったわけではないけれど、一言でその人をきづつけてしまうお話でした。私も自分の一言で相手をきづつけてしまった事があり、その後この本を読んで、言葉というのは相手を喜ばせることもできるけど気をつけて使わないと相手を悲しませることもあることを、もう一度考えました。人と会話をしている時に、言ってはいけないことを言ってしまったと思ったらすぐに「ごめんなさい。」と謝れるようになりたいです。

二人目は美和の親友の「由奈」です。学校ではおとなしい女の子の話です。なかなか自分の意見をはっきり言うことが苦手な由奈の友達が美和でした。その美和がいじめられているのを誰にも相談が出来ずに一人で抱えこんでいたのが自分の小学校の時と重なりました。でも、親に相談する勇氣があれば助けてくれたと思います。私は一度相談して助けてもらったので、何でも相談するし話すようになり、隠し事も無くなりつらいことも無くなって行きました。



三人目は美和をいじめていた「絵梨香」の話でした。絵梨香はいじめられていたわけではありませんでした。でも家のストレスと美和の言った一言にとてもきずついて、いじめを始めてしまいました。私はどんな理由があってもいじめは絶対にしてはいけない事だと思いました。

この本を読んで私が思った事は、言葉に気をつける・相談する・出来た友達を大切にすることです。人にされたり、言われたりして嫌なことは言わない・しないようにしたいです。そして、人と自分の命と個性を大切にしていきたいです。



『がばいばあちゃん』を読んで

高2F 吉田有貴子



私がこの小説を選んだ理由は、一度テレビで放送された際に見て、もっと「がばいばあちゃん」について知りたいなと思ったからです。

私がこの小説を読んで心に残った所は、二つあります。まず、一つ目は、「叶わなくても夢は持て」という所です。その理由は、がばいばあちゃんの言葉で「世間に見栄を張ったり、世間を気にするのが一番だめだ」という所がありました。私は、とても深い言葉だと思いました。そう思った理由は、人間は、世間に見栄を張るからつらくなっているのだから、迷って、人を恨んだり自殺をする人がいるのだから、この言葉は、とても深いなあと思いました。だから私は、あまり見栄など張らずにそのままの自分で生きていたいと思います。

次に二つ目は「夢は叶わなくても良い、しょせん夢は夢なんだから。死ぬまで夢はどんな見ろ。人生はそれの繰り返しだ。」というがばいばあちゃんという言葉が心に残りました。その理由は、人生は長いようで短いので、たくさんの夢や希望を持って生きたいと読んで思ったからです。

私は、この「がばいばあちゃん」を読んで、がばいばあちゃんは、とてもたくましい人だと思いました。私もがばいばあちゃんのようにたくましく強く生きていたいと思います。

『むかしむかしとらとねこは』

を読んで

中3 A 下柳篤史



僕が、この本を選んだのは、動物の本がよかったからです。本を読んだらおもしろかったです。

このお話は、のろまのとらが、すばしっこいねこに、えもののと리카たを教えてもらうお話です。高いところからけがをしないように飛びおる方法や速く走る方法、えものに気づかれないように近づく方法を教えてもらいました。えものをとるのが上手になったのは、ねこの事を食べたいといっておいかけました。でも、ねこは、高いところの上がってたすかりました。

僕がおもしろかったのは、いろんなえものをとるために、大切な事を教えてもらうところでした。お話の最後にねこがとらに食べられそうになりました。ねこは、速く走って木の上になげました。食べられなくてよかったです。食べられたら、かわいそうです。

また、図書館に行っておもしろそうな本を読みます。

『あらしのよるに』を読んで

中3 A 瀧本真壮



ガブとメイはおたがいてき同士だけど、くらやみでおいが分からない時に出会いました。ぼくもカミナリがきらいだけど、ガブもメイもカミナリがこわくて、ビックリしながら、あらしがおさまるまでいっしょにすごしました。そして、てき同士なのが分からないま

ま、また会う約束をして合言葉を「あらしのよるに」と決めてわかれしました。天気の良い日に会って、お互い好きなのが分かってビックリしたけど、ガブはメイを食べなかつたし、メイはガブからにげませんでした。それは、おたがいにこわい思いをいっしょにした友達だからだけど、すごいなあと思いました。もしあの夜がなかったらガブはメイを食べていたと思います。ガブとメイがなかよくしているのをやぎやオオカミに知られてしまつて、おわれてにげてる時ものどんなにおなかへってる時も、ガブはメイを食べなかつたのでえらいなあと思いました。ガブは弱って歩けないメイをたすけたりしてすごいなあと思います。



メイが生きるために自分を食べてと言ったけど、食べれなくて外へ出た時、オオカミが近くに來ている事がわかつて、穴からはなれてたかいました。その時です。なだれにあつてガブはいなくなつてしまいました。でも、メイはガブは生きているとしんじてさがしてえらいと思いました。なだれで何もかもわすれてしまったガブに食べられそうになつても、メイが今までの事を話すとガブは「あらしのよるに」という合言葉を思い出してメイを食べませんでした。

ぼくは、またなかよしになつてよかつたと思います。てき同士だけど助け合つた二ひきは、なかまだと思います。ぼくも困つた時やしんどい時に友達をたすけたいです。

友達を大切にしたいと思います。



井上ひさし著

『四千万歩の男』を読んで

大森哲也



五十を過ぎた私は、昨年八月より健康のために五十分から一時間、距離にして五キロメートルから七キロメートルを歩いています。そのような時に読み始めたのが、この本でした。

主人公は、伊能忠敬。江戸時代後期に日本全国を歩いて日本地図を作り上げた人物です。彼は、五十歳になって、天文学を学ぶために江戸に出ます。当時日本一の天文学者、高橋至時（三十二歳）の門弟となるのです。そして、地球の直径を表すために、緯度一度の距離を測ろうと、幕府の許可を得て、北海道に向かって歩き出します。五十五歳でした。

一定の歩幅で、雨・風・雪をものともせず、危険な場所も果敢に挑んでいきます。一日約四十キロメートルを測量しながら歩くのです。様々な人との出会い、事件を乗り越えて、まさに水戸黄門が測量しているような展開です。史実ではないことも多々ありますが、思わず内容に引き込まれていきます。人生五十年の時代、伊能の向学心、向上心に頭が下がる思いです。そんな伊能忠敬に思いをはせて、今日も私は歩きます。



心に残った本

わたしの好きな本

宇都宮稔子



私には、好きな本がたくさんあります。幼少時代には『とちちゃんはどこ？』『ぐりとぐら』『シリーズ』。小学校時代には江戸川乱歩シリーズが好きでした。中学校時代には特別支援学校の教師を目指すきっかけとなった『みんなみんなぼくのともだち』『こわいことなんかあらへん』『愛、深き淵より』と出会い、今でも大切にしています。高校時代には、赤川次郎さんの本を読むことが好きでした。大学時代は、エッセイを読むことが多く、ナカムラミツル作品集がお気に入りです。社会人になった今、仕事関係の本を読む機会が増えましたが、気分転換に手に取るのは、『チビギャラ』『シリーズ』。動物キャラクターと共に添えてある言葉が、私を癒してくれたり勇気づけたりしてくれます。一ページ一ページが印象的に心に飛び込んできてその時の自分になります。クスッと笑えるのも気に入っています。



『星の王子様』

山上千洋



空に輝く幾億の星の中の一つ、小さな小さな星からやってきた、小さな小さな王子様。サハラ砂漠に不時着した「ぼく」との出会いから、物語は始まります。

大人には帽子にしか見えない絵も、王子様にはちゃんと「ウワバミ」に見えます。羊の入った箱を見れば、どんな羊か、自分で想像してわくわくすることができます。大人になるにつれて、忘れかけていたこと。目に見えるものだけが答えではないということ。この本には、いろいろなメッセージがあふれています。

「大切なことは、目にみえないんだよ」きつねから聞いた言葉をかみしめるように、王子様は「ぼく」につぶやきます。王子様がたった一輪の小さなバラを大切に思う気持ちと同じように、私たちが家族や友達、周りの人々を愛する気持ちは、目に見えませんが、でも、本当は、それはとても大切なことなのです。

現在、いろいろな方の翻訳で、新しい「星の王子様」が出版されています。何冊か読んでみましたが、私はやっぱり内藤濯（ないとう あり）さんの訳が一番好きです。ぜひ、一度ご覧になってみてください。